

<前回：モデルケースとしての進化論論争——対立図式とは何か>

(1)「科学と宗教」の対立図式

<関係史のアウトライン>

未分化／調和

／分離・分裂／対立／無関係／新たな関係へ

分化／区別(専門化)／緊張

古代

中世

近代初頭

啓蒙・19世紀

20世紀

(1) 対立図式と進化論

1. 対立図式の成立は、比較的最近の事態であり、歴史的現象である。論理的なレベルでの分析には限界がある。

2. 自然神学の伝統と生命論：生命現象という最後の砦

3. 進化論論争は、現代も続く対立図式の分析にとって、モデルケースとなり、教訓的である。進化論は、「宗教と科学の対立論」(対立図式)の典型例であり、「科学技術の神学」系に対しても、いわば古典的な問題といえる。

4. 問題：

1) キリスト教の創造論と科学的進化論は、異なる(=非)。しかし、それは矛盾・対立(=反)を意味するか？

2) なぜ対立図式は発生し、現在まで持続しているのか？

(2) 進化論と創造論は対立する？

6. 聖書の創造物語は、まさに「物語」であって、本来多義的な解釈を許す。対立的に解釈できるし、反対の解釈も可能である。

8. キリスト教的創造論と進化論との対立の根拠は、キリスト教的創造論に組み込まれたアリストテレスの生命論である。

個体＝形相と質料、形相＝種(不変性)

9. アリストテレス的な実体形而上学の枠組みを切り離すならば、創造論は進化論と必ずしも矛盾しないことになる。

↓

問われるべきは、神の創造行為と種の変化(さらには世界内に生じる変化全般)とはいかなる関係にあるかということ。

キリスト教思想は、神の創造行為(継続的創造)を個々の変化に直接結びつける立場から、世界の法則性(自然法あるいは自然法則)の制定にとどめる立場まで、多様である。

(3) 進化論論争の歴史を振り返る

10. 進化論と対立図式の結びつきをどのように理解するか。マクグラスは、「一九世紀初頭のイギリス社会における二つのエリート集団間の闘争」という社会史的文脈において進化論論争を分析する研究動向について次のようにまとめている。

11. 進化論論争は、現代の科学研究の中心的担い手である専門職業的な科学者集団の登場という文脈に位置づけられるべき事例。科学技術は、社会的存在としての人間の営み。

12. 19世紀のダーウィンの進化論の登場→進化論論争、しかし、初期の論争は、科学も宗教がそれぞれの範囲を逸脱して行った感情的応答と言わねばならない。

・19世紀の進化論は十分に科学的か？

イデオロギーとしての進化論、社会ダーウィニズム。

・進化論は神の否定を帰結するとは限らない。第一次原因と第二次原因(直接的と間

接的)の区別を導入すれば、神の摂理(第一次原因)と進化論(第二次原因の理論)とは、対立するを回避できる。

13. ジョルジョ・アガンベン『身体の使用——脱構成的可能態の理論のために』(みすず書房、2016年(原著、2014年))。

(4) 現代の問題

15. 現代の対立図式の典型:キリスト教的原理主義と無神論的原理主義。

16. ダーウィン当時の進化論と現代進化論との大きな違い。

16. 「分子生物学により、生命の系統樹全体の再構成が可能になった」。現代進化論がダーウィン当時の半科学とでも言うべき状況から、隣接の諸科学と相互に緊密に結び付けられた「科学」理論へと移行したこと。

↓

進化論を隣接の諸科学から分離して、それだけを否定するという論法は成り立ちにくい。
・薬学との関わり。

2. 自然主義の二つのタイプ

0. 17世紀のイギリスの状況 → 近代社会の母体

科学革命の世紀=近代科学誕生の世紀。政治的また経済的な混乱の世紀。

17世紀イギリスの争点

政治:絶対王制/共和制、ピューリタン革命と王政復古、名誉革命、王党派と議会派

経済:封建的経済秩序/資本主義・市場経済

宗教:イギリス国教会/ピューリタン右派から中間派、そして左派

1. 16世紀のイギリス宗教改革の特性とその歴史的展開。

上からの宗教改革、カトリックとプロテスタントの中間(中道あるいは中途半端)

(1) 科学革命と政治・キリスト教、ニュートン主義の自然神学

2. マートン・テーゼ:キリスト教(とくにプロテスタント・ピューリタニズム)は近代科学の形成に積極的かつ実質的な寄与を行った。王立協会の初期のメンバーの多くはピューリタンの信仰の持ち主であった。

3. 穏健な王制・国教会体制を擁護するという機能を有するいわばイデオロギーとしての科学。ニュートンとニュートン主義者は、最新の科学的知見(新科学)によって、無神論的思想傾向を含む論敵(右と左の)たちを合理的に論駁することを目指した。

4. 17世紀までの多くの科学者にとって、自然探究は、神の創造の偉大さを讃美すること(=宗教的業)であり、ニュートン科学は、無神論論駁という意図と結びついていた。

5. ニュートン研究の進展 → ニュートンの知的世界の全貌

自然科学/自然哲学/自然神学/歴史神学/聖書解釈

6. イデオロギーとしての自然神学・自然科学。デザイン神学(Design Theology)

1) 世界における見事な秩序・法則=デザイン

2) 偶然ではない

3) デザイナーとしての神の存在

7. ボイル講演:ニュートンの弟子たち(ベントリー、デラム、クラークら)の活躍。

ニュートン主義的キリスト教、広教会主義

(2) 18世紀と聖俗革命、啓蒙主義の帰結

8. 西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解は、この変動に規定されている。

村上陽一郎の「聖俗革命」:「神—世界—人間」→「世界—人間」

9. 「近代科学」の自律化:一つの自律的な活動としての近代科学の自立。→啓蒙的知、啓蒙的な科学理念(実証科学としての自然科学)の誕生。

諸科学・諸学問のモデル=近代的知のモデル。

↓

自然主義

10. 代表例としてのラプラス

「われわれは、宇宙の現在の状態はそれに先立つ状態の結果であり、それ以後の状態の原因であると考えなければならない。ある知性が、与えられた時点において、自然を動かしているすべての力と自然を構成しているすべての存在物の各々の状況を知っていると、さらにこれらの与えられた情報を分析する能力をもっているとしたならば、この知性は、同一の方程式のもとに宇宙のなかの最も大きな物体の運動も、また最も軽い原子の運動をも包摂せしめるであろう。この知性にとって不確かなものは何一つないであろうし、その目には未来も過去と同様に現存することであろう。」(ラプラス、『確率の哲学的試論』、岩波文庫、10頁)

11. 注意点:科学の分野における相違あるいは時差

12. 宗教の私事化:宗教改革以降の教派的多元性の状況下での教派間対立→「政教分離」システムと信教の自由(宗教的寛容)

→公共の領域を私的な事柄(宗教、道徳、経済)の対立から切り離す。宗教を私的なものとして位置付けられる(私事化)。

13. 理神論(Deism):キリスト教思想の合理化

エドワード・ハーバード(Herbert, Edward 1581-1648、チャーベリーのハーバード)、ジョン・ロック(Locke, John 1632-1704、『キリスト教の合理性』)、ジョン・トランド(Toland, John 1670-1722)、カント『単なる理性の限界内の宗教』(1793)。

14. 歴史主義と自然主義:近代的知における知識あるいは思考・思惟のあり方に大きな変化→自然法的な超歴史的思惟、あるいは伝統的キリスト教の超自然主義からの離脱。

・思惟の歴史化(思惟の歴史性の自覚)

自然法的な超歴史的思惟 → 歴史主義

・超自然主義批判としての自然主義

超自然主義 → 自然主義

15. 「自然主義と歴史主義とは、近代世界の二つの巨大な科学的創造であり、この意味においてそれらは、古代にも中世も知られていなかったものであった。」

「自然主義」は、あらゆる質的なことや直接的経験を度外視する法則的な連関として、また、そのようなものとして現実総体を包括する連関として理解されねばならない。それは、数学的に最大限表現可能な量的関係法則の体系を一般的意識による日常経験の下に打ち立てることであり、純然たる空間の本質から由来する数学的定式によって、さまざまな感覚的経験像とそれらの相互連関とを表すことで或る。かくしてそれは、人間精神がかつて

到達したうちでもっとも大いなる、偶然や視覚的外観からの解放であり、最も膨大な広がり
りと明晰さをもつものであり、あらゆる技術の最も驚くべき土台である。」「哲学的な出発
点や統一感覚から完全に解放され、純然たる実証科学としてあらゆる精神的エネルギーと
注目を吸収し尽すにいたった。」(トレルチ、159)

cf.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』1936年。

(3) 合理性の複数性

進化論論争：現代の科学技術とキリスト教思想(神学)とを学問として相互に関係づけ
る際のモデル・ケース。

16. リチャード・ドーキンス(『神は妄想である——宗教との決別』早川書房)とインテ
リジェント・デザイン論(ID論=知的設計論)との対比。

ドーキンス：著名な生物学者であり、利己的遺伝子をめぐる議論は日本でも広く注目
されているが、同時に、彼は宗教批判の科学者という顔をもっている。しかし、『神
は妄想である』を読むとき、そこには宗教批判が多くの論点にわたって展開。
重要な指摘も見られるものの、全体的には昔からの定番の宗教批判の繰り返し。
宗教と科学の原理的な対立を前提に論を組み立てており、いわば、「無神論原理主
義」というべき立場。

17. マクグラス。

「ヨハネ・パウロ二世の声明(「生物進化論がもつある種の唯物論的な解釈を批判する一
方で、生物進化に関する一般的な観念を支持する」)が進化論を受け入れることができた
ということ、ドーキンスはまったく受け入れられなかった。つまり、パウロ二世は本
当のことを語っていないのではないか。彼が[本当のことを]語っているはずがない。」

18. キリスト教側の原理主義(宗教原理主義)：進化論は科学として間違っており、創造
論こそが正しい科学である。

↓

この二つの主張。「科学と宗教」は原理的に対立するという原理主義を採用する点でま
たく同じ。進化論が合理的なら創造論は非合理的、あるいは創造論が合理的なら進化論は
非合理的なはずであると、つまり、合理性とは一種類(=自分の立場)しか存在しないと
考える(合理性の一元論)。

↓

きわめて狭い、そして独善的な合理性理解であり、したがって、より柔軟で広い合理性
概念を取り戻すことが、ともすれば泥沼に陥りがちな進化論論争を解決する手がかりとな
るのである。

19. ジョン・ヒック『宗教の哲学』(勁草書房、原著初版1963年)。

一九世紀の懐疑主義者クリフォードの証拠主義(「不十分な証拠をもとにして何かを信じ
ることは、いつでも、どこでも、誰に対しても間違っている」)について、この議論は「合
理的信念の基盤としては狭すぎる」と指摘している。この指摘は、晩年の『人はいかにし
て神と出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』(法蔵館、原著2006年)において
は、「批判的信頼」の議論として展開(ヒック宗教哲学における首尾一貫した主張)。

20. 「ムーアは、私たちのだれもが共有し、共通する日常言語で表現する日常の知識は、
哲学的議論の裏づけを必要とせず、また裏づけを可能ともしないと主張している。」「これ

は、とくに疑う理由がないかぎり、そこにあるように見えるものはそこに存在するものとして受け入れる、ということを指している。……通常、私たちは自らの経験を信頼している。また、もし信頼しなければ、一日たりとも、いや一時間たりとも生きていくことができないだろう。しかし、これは盲目的な信頼ではなく、原理上、いつでも修正のできる批判的な信頼である。」

21. ヒックの提案。この「批判的信頼」の原理を、宗教体験にも適用すること。

科学的、日常的、そして宗教的など、私たちはさまざまなタイプの経験に信頼し、しかも、必要に応じて、それらを批判的に吟味しつつ生きている。これは理に適った、つまり生きる上で合理的な態度である。

22. 合理性の複数性。

世界における人間の経験は、決して一様ではなく、多岐にわたり多様である。経験に批判的に信頼して生きることは、それが自分の経験とは異なっている、「合理的」であると認め合うこと。

↓

無神論原理主義と創造論原理主義の双方に欠けているのは、経験の多様性と合理性の複数性についての感性。それに気づくとき、進化論論争のアポリアを超えて進む道を見出すことができるように思われる。

(4) 二つの自然主義

23. 合理性の複数性 → キリスト教としばしば対立的に捉えられる近代的な自然主義(自然の事柄は自然の内部で説明される)についても再考を促す。

24. デイヴィッド・R・グリフィン。David Ray (1939-)

アメリカ・オレゴン州出身の神学者、哲学者。ジョン・B・カブと共に、プロセス神学第二世代を代表する神学者であり、クレアモント神学大学院大学においてプロセス神学研究センターの設立に関わり、共同所長を務めた。グリフィンは、クレアモント神学大学院大学において学生として学びはじめた当初、東洋の宗教思想(インド哲学)に関心をもっていたが、ホワイトヘッド哲学についてのカブの演習に出席し、プロセス神学を志すようになる。グリフィンは、キリスト論、神義論といった伝統的なキリスト教神学の主題に、ホワイトヘッド哲学を適用することを試み、またホワイトヘッド哲学がもつポスト近代的側面(非感覚主義的な認識論、汎経験主義的な存在論)から、心身問題などの哲学的問題にアプローチした。グリフィンは、ポスト近代の思想状況の中で、宗教と科学の対立図式の克服を提唱しているが、その関心は、プロセス神学を中心に、ポスト近代の諸思想や超心理学、また進化論など、広範に及んでいる。また、9・11の同時多発テロに関しても、積極的にも発言(陰謀説)を行っている。

[主著] ジョン・B・カブ、D・R・グリフィン『プロセス神学の展望——概論的解説』(新教出版社、1993年)。

25. ダーウィン自身とダーヴィニズム(とくに、ネオ・ダーヴィニズムあるいはダーヴィニズムの精神)との相違、またダーヴィニズム(とくに、ネオ・ダーヴィニズム)と進化論一般との区別を指摘しつつ、進化論を構成する14の構成要素を抽出。

14の構成要素の内、次の4つのみを含む立場を、弱い進化論(弱い・広義の自然主義)と規定する。①マイクロ・レベルの進化(遺伝子レベルのあるいは表現型の変化・変異)、②

マクロ・レベルの進化（先行する種から現存のすべての生命の種が発生するというマクロ進化。生命の系統分類学の問題）、③自然主義（マクロ・レベルでの進化の説明のために通常の因果的プロセスに対する奇跡的超自然的な干渉を導入することを認めない、という最低限度の意味における自然主義）、④斉一主義（超自然的な神の干渉を排除し因果的な要因のみを用いるという存在論的な斉一主義）。

26. これら四つの構成要素以外の、たとえば、機械論、唯物論、決定論（世界は例外なしに原因と結果の決定論的な体系であること）、実証主義（進化のすべての原因は観察によって原理的には検証可能であるとする）、還元主義などをも含む立場は、強い進化論（強い・狭義の自然主義）として弱い進化論から区別。

27. グリフィン：弱い進化論はキリスト教などの有神論と調和可能であり、進化論は有神論と矛盾する強い進化論 — 機械論、唯物論、決定論、実証主義、還元主義といった要素は相互に結びつき強化し合うことによって徹底した無神論とニヒリズムを帰結 — に限定される必要はない。

<参考文献>

1. 芦名定道 『自然神学再考——近代世界とキリスト教』 晃洋書房。
2. マーガレット・ジェイコブ 『ニュートン主義とイギリス革命』 学術書房。
3. フランク・E. マニユエル 『ニュートンの宗教』 法政大学出版局。
4. ウェストホール 『アイザック・ニュートン I、II』 平凡社。
5. 村上陽一郎 『近代科学と聖俗革命』 新曜社。
6. ジョン・トーランド 『秘義なきキリスト教』 法政大学出版局。
7. トレルチ 『歴史主義とその諸問題』 上、ヨルダン社。
8. David Ray Griffin, *Religion and Scientific Naturalism. Overcoming the Conflicts*, State University of New York Press, 2000.